【原著】

推薦・AO 入試の利用希望と県内進学希望

――島根大学入試センターの取り組みの検証をもとに――

雨森聡，森朋子（島根大学教育開発センター），田中均（島根大学入試センター），
濱名篤，濱名陽子，佐藤広志（関西国際大学），芝野淳一（大阪大学大学院），
山内乾史，川嶋太津夫（神戸大学）

高校生の進路選択に関する知見を参考に，受験者の掘り起し等の入試戦略を立てることが可能である。その戦略について社会調査データを用いて検証し，課題について述べることが本稿の目的である。分析より，島根大学入試センターの受験者の掘り起こし戦略の対象が妥当であることや，AO 入試の有り方を再検討する必要があることが明らかになった。

1 はじめに

大学等進学率が近年 50 %を上回っていることを受けて，日本の高等教育はユニバーサル段階に突入したと語られている。進学率の上昇には，これまで高校の種別や個人の学力からして進学しなかった層が進学するようになったことが影響していると言われており，この層の進学が学生の多様化の一要因となっている。

これまで進学しなかったこの層は，当然のことながら全員ではないが，推薦入試や AO 入試を利用し，大学に入学してきている。この点については，国公立大学において，合格実績のなかった，少なかった高校や進路多様校からの出願・入学が，AO 入試によって増えたことが窺われるという指摘がある（白川・島田，2007; 中村，2010）。すなわち，大学入試の多様化・弾力化が受験ならびに進学層の拡大に一役買っているのである。

この非進学層の進学について中村(2006)は，専門高校生の教育アスピレーションの推移や，高校タイプ別に学内成績と推薦入試許容感の関連等をデータを元に議論しており，「専門高校からの大学進学の問題に，推薦入学制度は深く関連づけられており，実際の進学や高校での進路指導においてかなり利用されている」，「生徒の側の意識においても，内申書による選抜に賛成するものは，大学進学への志望変更者が多い傾向にあり，推薦入学制度が専門高校からの大学進学を促進あるいは下支えしている可能性がある」と述べている。この研究同様に，専門高校生が推薦入学制度を利用し，大学に進学していることを指摘する研究は他にも存在する（中村，1997; 荒川，2000）。

高校生の大学受験・進学層の拡大は，何も専門高校に限ったことではなく，普通高校，とくに，その中でも中下位校においても同様に生じている。望月(2008)は，高校の偏差値をもとに，高校を 2 つのグループに分け，このグループと国公立大学に出願する際の入試方法や受験勉強科目数等の関連を分析し，特別選抜入試拡大の影響を論じている。分析より望月は，「特別選抜入試，特に AO 入試の拡大により，中下位校に在籍する生徒も，大学進学に対する高い意識をもった上で国公立大学に目を向けている」ことを明らかにしている。

上述した研究は教育社会学の文脈で議論されてきたトラッキングと関連がある

(Rosenbaum, 1976)。トラッキングとは，「実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定されること」を意味する（藤田，1980）。換言すると，専門高校に入学すれば就職しやすく，普通高校に入学すれば進学しやすい，というように，どの高校に入学するか，どのコース・クラスに入るかで卒業後の進路選択がおよそ決定されるということである。このトラッキングを弛緩するべく，大学入試が多様化・弾力化され，受験層ならびに進学層が拡大しているのが現況である。

このいわゆるアカデミック・トラックとは別の視点として，吉川(2001)は「地方の出身者が，アカデミックな進路選択とは別次元のものとして，自らの地域移動について選択していく進路の流れ」を意味するローカル・トラックの存在を述べている。受験生のすべてが難易度の高さや有名校であるかどうかで進学先を決めているのではなく，地域という観点に基づいて進路選択を行っているという指摘である。

また，冨江(1997)は，「進路選択において学業成績による選抜とは別の，独自の性格を持った地域についての軸の存在」を指摘し，成績を中心とした選抜ほど強くはないが進路選択における地元志向について議論を行っている。この他，李(2004)，石戸谷(2004)も同様に，高校生の進路選択における地元志向や地域重視について言及している。

以上のように，高校生は進路選択に際して，地元を考慮することや，進路多様校においては推薦・AO入試を用いて当該校ではこれまで非進学層であった者たちも進学するようになったことが明らかになっている。

これらの知見をもとに，島根大学入試センターは，進路多様校への広報活動や高大接続事業等に注力し，当該校からの本学受験者の掘り起こしを行ってきた。進路多様校であることから入試形態は，推薦・AO入試が主になることは否めない。

さて，これまでの教育社会学などの知見をもとに戦略的な入学者受け入れを構想するなら，上述した通りになるが，果たしてこれが妥当であるかはわからない。感覚的には妥当であるが，実際はどうであるかを本稿で検証する。

具体的には，島根県内への大学進学意識に対して，推薦・AO入試の利用希望，地域，高校階層のうち何が影響しているかを社会調査データを用いて明らかにし，その結果を元に戦略の妥当性を検討する。

ところで，進路多様校からの推薦・AO入学者，とくに専門高校からの入学者は，高校のカリキュラムの都合上，数Ⅲなどを習わずに入学する場合がある。もし，本学入試センターの計画が妥当であるなら，未習科目を有した学生が入学してくることになり，そのような学生に対して，なんらかのサポートを行う必要が生じる。この点については，最後に述べることにする。

2 調査の概要

1）調査名：「高校生の進路と将来設計に関する意識調査」

2）調査時期：2011年10月・11月

3）調査対象者：島根県に住む高校生のうち，公立高校に在籍する2年生全員の中から，近隣に高等教育機関があるかないかや学力を考慮し，さらに在籍者数の比率を保てるようにした上で，無作為に抽出した2000人を対象としている。なお，調査拒否等の高校があったため，有効回答数は1401名となっている。ここでいう「近隣に高等教育機関がある」地域というのは高等教育機関に通学可能な地域を意味している。また学力は偏差値を基準に3つに区分している。これら地域，学力で層化し，調査対象者を抽出している。

4）調査方法：自記式質問票を用いた集合調査による。高校に調査への協力を依頼し，協

力の承諾が得られた高校に調査票を郵送し，こちらが指定した学科・人数にできるだけ沿う形で対象校に調査協力を求め，各校の実情に応じて調査実施日を決めてもらい，実施を依頼した。調査票はA4サイズで15頁，回答所要時間はおよそ20分を想定した。

5）調査実施組織：地域高等教育研究会（代表：川嶋太津夫）

6）その他：本調査は兵庫県三木市周辺市町村に住む高校2年生にも実施しているが，本稿では研究の目的より，島根県での調査で得られたデータのみを用いる。

3 分析

3.1 分析の対象となる生徒

調査対象者を選定する際に層化を行ったが，その層（以下，高校階層）と大学進学を進路として考えているかどうかとの関連を示したのが表1である。表に示した数値のうち人数以外は百分率である。

繰り返しになるが，今回実施した調査では，近隣に大学があるかどうかと学力の程度で層化している。学力下位層には，専門高校や総合学科の高校，普通科でも大学進学率が低い高校が該当する。

表より，学力上位層・中位層は近隣に大学があろうとなかろうと，それらのほとんどが大学進学を進路として考えているが，下位層でそう考えているのはおよそ半数にとどまっている。

本研究では，全回答者のうち，大学進学を進路としている生徒を分析の対象とする。つまり，分析対象者数の最大値は1401名ではなく，その71.9%にあたる1007名となる。

3.2 使用する変数とその分布

3.2.1 高校階層

大学進学には大学の地域的な遍在性が影響を与えている（雨森，2008）。例えば，居住地から通学可能な大学がない生徒が進学する場合，下宿せざるをえなくなり，自宅通学生以上の経済的に負担しなければならなくなる。

家族や本人がこの経済的な負担に耐えられないと考えた場合，進学自体をそもそも考えない可能性がある。また，自身の学力や自身が学びたい内容が近隣の大学との間でミスマッチが生じており，そのミスマッチを妥協できない場合，県外の大学に進学せざるを得なくなる。このように，近隣に大学があるかないかや，学力的なミスマッチは進路選択や進学先を結滞する際に重要な要因となりうるのである。

この大学の地域的な遍在性や高校のレベルを考慮するために，前項で説明した高校階層を用いる。

3.2.2 県内進学希望

「あなたはどの地域の学校に進学したいと思っていますか。」と問い，回答を都道府県

表1　高校階層と大学進路意識の関連

近隣に大学が	学力	大学進学を進路として 考えていない	考えている	計	人数
ある地域	上位	3.8	96.2	100.0	209
	中位	1.7	98.3	100.0	229
	下位	50.2	49.8	100.0	440
ない地域	上位	1.6	98.4	100.0	61
	中位	0.0	100.0	100.0	79
	下位	41.8	58.2	100.0	383
	計	28.1	71.9	100.0	1401

名の自由記述方式で得た。その回答をもとに，県内進学希望か県外進学希望かの分類を行った。この分類と高校階層との関連を示したのが表2である。表に示した数値のうち人数以外は百分率である。

表2より，下位層は県内進学を希望し，中位層・上位層は県外進学を希望しているということがわかる。とくに，中位層よりも上位層の方が県外進学を希望している。表2に見られる傾向には，県内の大学の難易度と高校生の学力が関係していると考えられる。

県内にある大学の難易度は全国的に見て低く，中位層・上位層にとってはそれでは満足できず，県外の旧帝国大学や有名私学に進学することを望んでいると考えられる。

中位層・上位層の進学希望地を確認したところ，中国地方最難関の広島大学がある広島県が最も多く，それに岡山県，京都府，大阪府，東京都が続いている。

3.2.3 推薦・AO入試利用希望

本変数については，「あなたは，公募制推薦，AO選考という入試制度を利用して進学したいと考えていますか」という質問で，それぞれについて「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法で問うた質問を用い

表2　高校階層と進学希望地の関連

近隣に大学が	学力	県外進学希望	県内進学希望	計	人数
ある地域	上位	82.0	18.0	100.0	161
	中位	77.3	22.7	100.0	176
	下位	59.0	41.0	100.0	188
ない地域	上位	86.5	13.5	100.0	52
	中位	76.9	23.1	100.0	65
	下位	59.4	40.6	100.0	187
	計	70.6	29.4	100.0	829

表3　高校階層と入試利用希望の関連

		推薦入試				
近隣に大学が	学力	はい	どちらともいえない	いいえ	計	人数
ある地域	上位	6.5	47.0	46.5	100.0	185
	中位	8.8	58.1	33.2	100.0	217
	下位	35.1	53.4	11.5	100.0	208
ない地域	上位	10.0	58.3	31.7	100.0	60
	中位	7.7	70.5	21.8	100.0	78
	下位	16.8	61.1	22.1	100.0	208
	計	15.8	56.6	27.6	100.0	956

		AO入試				
近隣に大学が	学力	はい	どちらともいえない	いいえ	計	人数
ある地域	上位	4.9	41.8	53.3	100.0	184
	中位	10.6	47.5	41.9	100.0	217
	下位	25.5	54.8	19.7	100.0	208
ない地域	上位	5.0	53.3	41.7	100.0	60
	中位	6.4	53.8	39.7	100.0	78
	下位	15.3	58.4	26.3	100.0	209
	計	13.1	51.3	35.7	100.0	956

ている。表3は公募制推薦（以下，推薦入試）ならびにAO選考（以下，AO入試）の利用希望と高校階層の関連を示したものである。表に示した数値のうち人数以外は百分率である。

まず推薦入試利用希望について。近隣に大学がある地域の学力下位層は推薦入試を利用したい，上位層・中位層は利用したくないと考えている。近隣に大学がない地域は，近隣に大学がある地域とおおまかな傾向は同じであるが，「どちらともいえない」の割合が高い点，下位層の利用したい割合が相対的に低い点が異なる。

次にAO入試利用希望についてであるが，傾向は基本的に推薦入試利用希望と同様である。

3.2.4 その他

理工系学部には男性の割合が，生活科学系学部や言語系学部には女性の割合が高いというように，学部選択と性別は関連するものである。島根県をはじめ，多くの地方部は大学があったとしても，学問内容が漏れなくあるわけではなく，学びたい内容を重視するなら県外の大学に進学することになる。

本研究においても性別は重要な要因となりうることから，性別を分析に用いる。

3.3 県内進学と入試利用希望

本項では，前項で説明した変数を用いて，県内進学を規定するものは何であるかを明らかにする。

分析に先立って，各変数をダミー変数化している。具体的には，県内進学希望は県外希望を0・県内希望を1，高校階層は学力下位層を0・これ以外を1に，推薦・AO入試利用希望は「どちらともいえない」「いいえ」を0・「はい」を1，性別は女性を0・男性を1としている。

県内進学希望を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果について示したのが表4である。表4の左側は入試利用希望が推薦入試のときの回帰係数，右側はAO入試のときの回帰係数を示している。なお，分析は大学が近隣にある地域・ない地域別に行っている。

まず左の推薦入試利用希望の方を見ると，県内進学希望に対して推薦入試利用希望は影響しておらず，両地域とも高校階層と性別が影響を与えている。高校階層の影響の仕方は双方とも同じで，学力中位・上位層よりも下位層のほうが県内進学を希望している。しかし，性別の影響については異なっており，大学がない地域は男性の方が，大学がある地域は女性の方が県内進学を希望している。

次に右のAO入試利用希望について見ると，推薦入試利用希望の場合とほぼ同じ影響関係になっていることがわかるが，1点だけ異なる点がある。それは大学がある地域におけるAO入試利用希望の影響である。係数は

表4　県内進学希望（0：県外・1：県内）の規定要因

大学が・・・	ない地域	ある地域
	B	B
性別(1:男性)	0.624 *	-0.592 **
高校階層(0:学力下位)		
学力中位	-0.774 *	-0.906 **
学力上位	-1.516 **	-1.104 **
推薦入試利用希望	0.243	-0.042
定数	-0.786	-0.080
N	293	504
χ^2	0.000	0.000
-2LL	342.012	569.553
Nagelkerke R^2	0.098	0.087

大学が・・・	ない地域	ある地域
	B	B
性別(1:男性)	0.585 *	-0.600 **
高校階層(0:学力下位)		
学力中位	-0.814 *	-1.003 **
学力上位	-1.560 **	-1.260 **
AO入試利用希望	-0.130	-0.783 *
定数	-0.693	0.069
N	295	504
χ^2	0.000	0.000
-2LL	345.385	561.429
Nagelkerke R^2	0.096	0.104

**p<0.01，　*p<0.05

マイナスの値を取っていることから，AO入試を利用したくない生徒の方が県外に進学したい，AO入試を利用したいと考えている生徒が県内に進学したいということがわかる。

4 おわりに

本稿では，推薦入試ならびにAO入試の利用希望や高校階層が島根県の高校生の県内進学意識に影響を与えるかどうかをデータを用いて明らかにしてきた。分析をまとめると次のようになる。

学力上位・中位層よりも下位層の方が島根県内への進学を希望し（表4），学力下位層は上位・中位層よりもAO入試の利用を希望しているが（表3），AO入試の利用を希望する方が県外進学を希望する（表4）ようである。このことより，学力下位層は県内での進学を希望はしているが，学力的に県内での進学が厳しい場合は県外の大学へAO入試を使って進学したいと思っていると考えられる。

本学の入試センターは，先述したように，進路多様校への広報活動や高大接続事業等に注力し，当該校からの本学受験者の掘り起こしを行ってきた。このことが妥当かどうかであるが，県内進学を希望する学力下位層を掘り起こしの対象としている点は妥当である。入試利用希望については，推薦入試利用希望は県内進学希望に影響しておらず，大学が近隣にある地域においてAO入試利用希望が県外進学希望に影響していることから，本学は推薦入試よりもAO入試の有り方を考える必要があることがわかる。

また，表4より，AO入試利用希望は県外進学希望に影響を与えているわけであるが，これは本学を中心に考えるなら，AO入試利用希望層は存在するがそれを本学は取り込めていないと解釈することができる。本稿の結果は，AO入試の実施方法を変えるなど，この取り込みそこなった層への対応を検討する端緒になりうる。

このように，既存研究の知見を参考にし，入試に関する戦略を立て，高校生対象の調査を実施し，高校生の特性を明らかにし，さらに入試利用希望等について分析すれば，学生獲得の戦略を立てるのに役立つ知見を得ることができるのである。

ところで，進路多様校からの受験者の掘り起こしが成功すると，入学したはいいものの大学生活への適応がうまくいかないという問題が生じる。この問題は本学でも既に生じている。例えば，中等教育段階の内容の未習等があり，入学直後の基礎的な学習の段階でつまずいてしまうことがある。この点に関しては，リメディアル教育や学修支援による対応が不可欠である。このような問題に対処するべく，本学では，補完教育，補習教育，メンター制度など，学修サポートプログラムを教育開発センターと学部との協働で展開している（森・雨森, 2010）。また，学力的な適応以外に，友人ができない，専攻分野への意欲が湧かないなどの情緒的な適応も問題となる。この問題に対しては，本学では教育開発センターを中心に，初年次教育プログラムを展開している（鹿住ほか, 2011）。

多様な学生の大学入学に対応するには，多様な教育プログラムを準備する必要があり，そのためには，アドミッションを担当するセンターだけではなく，FD等を担当するセンターとの協働が必須であることは言うまでもない。本学においては入試センターと教育開発センターが協働し，取り組んでいるところである。

参考文献

雨森聡（2008）.「大学進学に対する地方居住のもつ意味――地域的教育機会格差に焦点を置いて」中村高康編『2005年SSM調査シリーズ6　階層社会の中の

教育現象』69-86 .

荒川葉（2000）.「学習指導組織・進路指導組織」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 83-106.

藤田英典（1980）.「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣 , 105-129.

石戸谷繁（2004）.「ローカリティーに生きる――「郡部校」生徒の進路選択」古賀正義編『学校のエスノグラフィー』嵯峨野書院, 93-119.

鹿住大助・森朋子・雨森聡（2011）.「PDCA サイクルによる島根大学初年次教育プログラムの質保証・質向上」『初年次教育学会誌』 **4(1)**, 71-78.

吉川徹（2001）.『学歴社会のローカル・トラック』世界思想社 .

望月由起（2008）.「高校生の進学アスピレーションに対する特別選抜入試拡大の影響――高校階層に着目して」『キャリア教育研究』, **26**, 49-56.

森朋子・雨森聡（2010）.「学部とセンターによる 1 年次カリキュラムのデザイン研究―学習科学がもたらす新しい FD の形―」『京都大学高等教育研究』 , **16**, 1-11.

中村高康（2011）.「高校生のローカリズムと大学進学――高大接続のもう一つの論点」『高等教育研究』, **14**, 47-61.

中村高康（2010）.『進路選択の過程と構造』ミネルヴァ書房 .

中村高康（2006）.「専門高校からの大学進学――アスピレーションの推移の分析から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 , **32**, 125-144.

中村高康（1997）.「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究――選抜方法多様化の社会学的分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, **37**, 77-89.

Rosenbaum, J. E. (1976). Making Inequality; the Hidden Curriculum of High School Tracking. New York, NY:John Wiley & Sons.

李敏（2004）.「選別の中に潜む「ジェンダー」――進学向上策のなかの共学校」古賀正義編『学校のエスノグラフィー』嵯峨野書院 , 63-90.

白川友紀・島田康行（2007）.「募集要項と募集広報から見た国立大学 AO 入試」『大学入試研究ジャーナル』, **17**, 1-6.

冨江英俊（1997）.「高校生の進路選択における「地元志向」の分析――都市イメージ・少子化との関連を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 , **37**, 145-154.